



纏向遺跡の史跡指定について

纏向学研究センター所長 寺澤 薫

昨年の10月17日、国（文化庁）の文化審議会の答申（6月21日）を受けて、纏向遺跡が史跡としての官報告示がなされました。すでに平成18年1月26日に、「纏向古墳群」として、石塚古墳、ホケノ山古墳については史跡指定がなされていましたが、ようやく広大な居住域（集落）部分についても、ほんのごく一部のエリアではありますが、国から史跡としての重要性が認められたことになります。

指定箇所は旧纏向小学校の跡地と3世紀の居館遺構（王宮か？）と推定される大形建物群が検出された地区の二箇所（写真参照）で、指定名称は「纏向遺跡（まきむくいせき）」、所在地は「奈良県桜井市大字辻地区内外18筆」、面積は「13,651.92㎡」となっています。

また指定の理由についての概要にはこう書かれています。「三世紀初頭に突如出現し、四世紀初め



写真1 纏向遺跡と史跡指定地の位置



まで営まれた大規模な集落で、東西二キロメートル、南北一・五キロメートルという、当該時期では類をみない規模を有する。……(中略)…… 当該時期の首長居館の構造、墓制や祭祀のあり方を知ることができる。周辺には纏向古墳群や箸墓古墳も存在し、これらの古墳との関わり、すなわち大和政権と関わりある遺跡とみなされ、我が国における古代国家形成期の状況を知る上できわめて重要である」。邪馬台国やヤマト説の有力な遺跡として卑弥呼の王宮所在地としての可能性も取りざたされている纏向遺跡ですが、まさにヤマト王権の本拠地として古代史上の重要性和、古代国家形成に直接関わる重要な遺跡として、この国の施策としても認定されたことになります。

1970年代、県営住宅と雇用促進住宅、そして纏向小学校の建設に伴って奈良県立橿原考古学研究所によっておこなわれた、当時の平野部での調査としては画期的ともいえる大規模発掘調査によってこの遺跡は日の目を見ました。それまではただ弥生時代後期頃の土器が散布しているというだけの遺跡が、弥生時代から古墳時代への移り変わりを知ることのできる巨大な平野部の集落遺跡として学界にデビューした瞬間でした。

1980年代になると、地元桜井市教育委員会によって遺跡の各所や古墳の調査が精力的に行われ、現在その調査次数は181回を数えるほどになりました。その成果はその都度、学界やマスコミを賑わせてきたことはあまりにも周知の通りです。そうした成果を踏まえて、纏向遺跡は3～4世紀のヤマト王権の中核機関が存在した場所であるとの考えが定着し、日本古代史上のエポックを飾る遺跡として不動の位置を占めるにまでになりました。そしてついには大形建物群の発見によって邪馬台国論、卑弥呼の王宮説までが議論されるほどになったのです。

この間、列島最古の前方後円墳と謳われた纏向石塚古墳とホケノ山古墳については史跡指定や整備の手が差し伸べられたものの、肝心の集落については、その重要性が声たかだかに叫ばれながらも残念ながら具体化することはありませんでした。

それから約30年。遺跡のデビューからは40年を経た今、やっと！（まさにそうしたいです）史跡指定が実現しました。土地所有者の方々の纏向遺跡に対するご理解と市長はじめ行政の一丸となった結束の賜と感謝しています。感無量というほかありません。

しかし重要なことは、国のお墨付きを拝領したという＜結果＞ではありません。行政が国レベルでこの遺跡の重要性を認めたということは、何よりも国・県・市の行政が、未来永劫、この遺跡をきちんと保存し管理し後世に残し伝えていくという決意の表明でもあります。保存と有効利用という両面の努力を決して怠ってはいけないという重責を担ったことになります。そして研究者は、日々調査と研究を重ね、この遺跡の歴史的意義と価値をより詳細に追究し明らかにしていくという学術的な研鑽と、それを正しくそしてオープンに国民に伝えていくという努力を課せられたことにもなります。

それだけではありません。史跡とは国民共有の最重要な文化遺産なのですから、国民一人一人がこの遺跡の動向をきちんと見守る権利と義務を同時に求められることにもなるのではないのでしょうか。史跡指定の同意をいただいた住民の方々をはじめ、纏向遺跡の範囲やその周辺で生活される方々は直接この関わりを感じるようになるかもしれません。これを機会に、将来、纏向遺跡をどうすべきなのか、住民にとって求められる住環境とはなにか、“地元”にとっての将来あるべき姿は、……等々、行政・研究者・市民が三位一体となって将来像を出し合い、信頼関係を構築していかなければなりません。

纏向遺跡のその他の重要地点や未知の重要箇所（たとえば現在確認されている王宮に続く第2次王宮の位置、倉庫群等々）、残された勝山古墳、矢塚古墳、東田大塚古墳などの史跡指定も今後の大きな課題です。さらには、山の辺の道や大神神社などの周囲の自然・文化遺産との一体化、天理市のおおやまと古墳群や田原本町の唐古・鍵遺跡などとの連携も重要な課題です。今回の史跡指定は纏向遺跡と纏向地区の将来像に向けての出発点に過ぎないのです。纏向学研究センターでは行政の研究機関としての立場からそうした提案を常に発信し続けていくつもりです。

《纏向遺跡第179次調査の成果 一近世集落を掘る一》

纏向遺跡第179次発掘調査は、東田大塚古墳の西約200mの地点、東田集落内で実施された発掘調査です。調査の結果、近世以降の溝、暗渠、土坑、流路跡などが見つかりました。溝はトレンチの南側を東西に走っており、その北側の肩には竹を用いた柵が設置されていました。暗渠はこの溝より新しいもので、地面を深く掘り下げ、竹を設置したものです。いずれも、近世頃の集落に関わる遺構であると想定されます。

なお、調査地周辺は纏向遺跡の西端にあたると考えられており、今回の調査では古墳時代における纏向遺跡の集落範囲の確認が期待されましたが、調査を通して古墳時代まで遡る遺構の発見はありませんでした。古墳時代の遺物の発見もほぼなかったため、調査地周辺は古墳時代の纏向遺跡の範囲を外れている可能性が考えられます。（杉山）



写真2 調査区全景（南から）

《纏向小学校の生徒さんが見学に来られました》



写真3 何に使ったんだろう？



写真4 所員が解説中

纏向学研究センターの北側に隣接する桜井市立纏向小学校の6年生の皆さんが、2013年5月24日に当研究センターへ見学に来られました。実は纏向遺跡の初期の調査で見つかった纏向大溝はこの学校の建設に伴って発掘調査されたものです。

普段桜井市内に住んでいても、土の中に埋まっている遺跡についてはなかなか意識する事がないので、生徒さんに纏向遺跡のどういう所が特徴的なのか、最初に所員が解説をおこないました。その後、クイズ形式で当時の土器がどのように使われていたのか、班に分かれて考えてもらいました。実際に当時の土器に触ってもらい、くっついていたりおコゲや形から使われ方を推測し、班ごとに発表してもらいました。皆さん実物を手にとって、真剣に考えている様子でした。

そののち纏向学研究センターで現在行っている、これまで纏向考古学通信でお伝えしてきた範囲確認調査の整理作業風景を見学していただきました。細かな作業に皆さん見入っている様子でした。

《第1回纏向学セミナーを開催しました》

2013年7月6日（土）に、桜井市立図書館研修室にて、第1回纏向学セミナーを纏向学研究センターの主催、桜井市立図書館の協賛により開催しました。当日は研修室が満員となる約300名の方々にご来場いただきました。

初めてのセミナーとなる今回は、奈良大学文学部教授の坂井秀弥先生を講師としてお招きし、坂井先生に『文化遺産「纏向遺跡」の意義とその将来』と題して、国の史跡指定の答申がされた纏向遺跡の歴史的意義などについて、学生時代の思い出をまじえながら、その重要性をわかりやすくご講演いただきました。

その後、第2部では寺澤薫所長の進行のもと、坂井先生との対談形式で講演が行われました。対談では、大規模な開発予定地をそのまま保護した吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡と違い、纏向遺跡は地元住民の方々が多くおられる中で、官・民・学が手を携えて遺跡を保護・活用していくことの重要性について意見交換がなされました。



写真5 満員の図書館研修室



写真6 対談する坂井先生と寺澤所長

《東京、日本橋の奈良まほろば館のイベントに参加しました》

天理市と桜井市の文化財や観光の見どころなどを首都圏の方々にご紹介するため企画されたイベント、「記紀・万葉の薫り漂う大和の国から纏向遺跡・オオヤマト古墳群がやってきた！」が、2013年8月15日（木）から8月27日（火）の間、東京・日本橋にあります奈良まほろば館で開催されました。

このイベント会期中に天理市教育委員会・当センター職員によるミニ講座や、勾玉作り、古代のお金铸造体験、纏向遺跡出土の土器の展示、山の辺ミュージカルの会によるミュージカルが行われ、当センターからは橋本・木場の両所員が参加してまいりました。

ミニ講座は満員で、纏向遺跡の最新の発掘調査状況についてご清聴いただきました。また、纏向遺跡出土の土器を展示するコーナーでは、実際に土器を触っていただいたりもしました。和同開珎や富本銭の铸造体験では、鋳型に溶かした金属を流し込むところから完成までの工程を所員の解説を交えながら体験していただきました。両日で200人近くの方々にご参加いただき盛況のうちに終ることができました。

ご参加・ご協力頂いた皆さん、本当にありがとうございました。



写真7 土器の解説



写真8 勾玉作り体験

《平成25年度の縄向考古楽講座を開催!!》

縄向学研究センターでは、平成25年度の縄向考古楽講座を3回にわたって開催しました。縄向考古楽講座は、これまで考古学や歴史に興味があってもあまり触れることのなかった方を対象としたもので、考古学者がどのように考えているのか、実際の遺物を触ったり、縄向遺跡を歩くことで体験して頂きました。講座には小学生から年配の方まで幅広く参加していただくことができました。また、遠方は遠く静岡県からお越しの方もあり、大変賑やかな講座となりました。

初回は縄向学研究センターで考古学の基本的な考え方について、実際に出土した遺物に触れながら知って頂きました。参加者は班に分かれて、考古学的方法に則って、次の2つの問題を討論しました。

【Q. 1】銅鐸がつくられた順番を考えてみよう!

【Q. 2】土器の使い方を考えてみよう!

討論は土器などの遺物や実測図などを使って観察を行いながら進められました。初対面の方同士という班構成でしたが、銅鐸や土器の形や大きさ、土器についた煤、お焦げなどから、作られた順番やどのように使ったのかという問いについて、真剣な議論が交わされていました。みなさん考古学にご興味をおもちのこともあり、会話がはずんでいる様子でした。班ごとの発表では、考古学者も顔負けな様々な観点と自由な発想からの発表がなされ、大いに盛り上がりました。

2回目には実際に縄向遺跡を散策する予定でしたが台風が接近して生憎の雨となり、3回目に行う予定の鑄造技術体験をおこないました。昔の方法を再現して制作されたシリコン製の鑄型に低い温度で溶ける合金を流し込んで、昔のお金である富本銭と和同開珎を作りました。参加者の皆さんは、熱した金属を鑄型に流し込む際は緊張している様子でしたが、鑄型を開けた瞬間は歓声があがっていました。

3回目は素晴らしい秋晴れとなり、縄向遺跡の発掘調査地点や遺跡内に所在する古墳などを歩いて見学しました。縄向石塚古墳や勝山古墳といった縄向古墳群のほか、6世紀の古墳で石室に入る事のできる珠城山古墳群にも行きました。このイベントでは、見学地点にちなんだクイズを出題し、謎解きを楽しみながら遺跡をめぐっていただくことにしました。普段見慣れた風景の中にも、実は古代の痕跡が眠っていることを皆さん実感しておられる様子でした。

平成26年度も縄向考古楽講座を開催する予定ですので、是非御参加ください。



写真9 土器を前に議論する皆さん



写真10 鑄造体験



写真11 縄向遺跡の散策

《桜井市縄向学研究センター東京フォーラムⅡ

「縄向出現 ―卑弥呼は九州にいたか?―」を開催しました!》

2013年11月4日（月・振替休日）に東京都千代田区有楽町のよみうりホールにて、東京フォーラムⅡ「縄向出現」を桜井市の主催、読売新聞社の後援により開催し、当日は約900人の方々にご来場いただきました。

2013年2月10日に開催いたしました東京フォーラムⅠでは、「縄向に卑弥呼がいたなら」をテーマに議論が交わされましたが、今回の東京フォーラムでは「卑弥呼は九州にいたか?」という邪馬台国九州説を考えるテーマで、九州の考古学界の第一線で活躍されている先生方を講師にお迎えしてご講演いただいた後、シンポジウムを行いました。

まず午前の部では、主催者を代表して松井正剛桜井市長からご来場頂きました方々にご挨拶申し上げた後、邪馬台国九州説の立場から、福岡県小郡市埋蔵文化財調査センター所長の片岡宏二先生より「卑弥呼がいた有力候補地―筑紫」と題したご講演をいただきました。続いて片岡先生の説を応援するかたちで、佐賀県立佐賀城本丸歴史館館長の七田忠昭先生より「卑弥呼の居処を探る―倭人伝が記す倭女王の宮殿の姿から―」と題してご講演いただきました。

午後の部では、邪馬台国縄向説に交代して、縄向学研究センターの橋本輝彦所員による「卑弥呼がいた有力候補地―縄向」と題した講演をおこなった後、日本考古学協会会員の荻谷俊介先生より「卑弥呼は縄向にいた」と題して、縄向説を援護する立場からのご講演をいただきました。

その後は、講師の皆様をパネリストに、そして寺澤薫所長をコーディネーターとして、「卑弥呼は九州にいたか?」をテーマにシンポジウムを行いました。シンポジウムでは、パネリストの方々が九州説、縄向説それぞれの主張に対して、白熱した議論が交わされました。会場にお越しになられた皆様はどちらに軍配をあげられたのでしょうか。

また、平成26年度は「邪馬台国東遷説を考える」をテーマとしたフォーラムの開催を目指していますのでご期待ください。多数のご参加、本当にありがとうございました。



写真 12 多くの方にご来場いただきました



写真 13 ご講演される片岡先生



写真 14 ご講演される七田先生

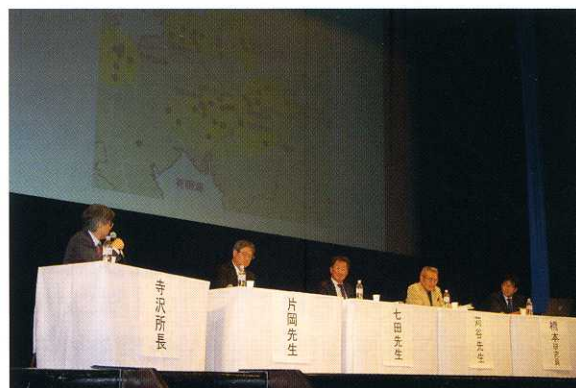


写真 15 白熱するシンポジウム

《第2回 定例研究集会を行いました》

2014年2月22・23日に、纏向学研究センターにて、第2回纏向学研究センター定例研究集会を開催しました。

定例研究集会はセンターの研究事業のひとつで、桜井市教育委員会が委嘱した非常勤の共同研究員の先生方や招聘した研究者にご参加いただき、研究発表や意見交換などを行うものです。考古学だけではなく、幅広い見地から共同して研究するため、各学界の一線の研究者をお招きしています。また今回は、他機関に所属の研究者にも研究発表をお願いしております。

今回は第2回目の研究集会ということで、初日は森暢郎所員が「古墳時代巴形石製品の出現と系譜」と題して発表し、通信第5号でご報告した、纏向遺跡第176次調査で出土した巴形石製品について検討がおこなわれました。その後は同志社大学大学院院生の児玉駿介氏より「纏向遺跡における空間情報の可視化」の題でご発表頂きました。纏向遺跡の遺構密度・分布を時期ごとに検討し、その変遷を視覚的に表現され、遺跡の変遷を検討されました。さらに休憩を挟んで、古代史をご専門とされる滋賀大学の鈴木正信氏より「氏族系譜からみたオオタネコ伝承」の題で発表いただきました。近年議論が活発となっている須恵器生産と大神氏の関係を踏まえ、大神氏の始祖であるオオタネコの伝承を検討し、大神氏と須恵器生産や、古墳時代の一大須恵器生産地である陶色との関わりを詳細に検討されました。

2日目は、午前中に福井県越前町教育委員会の堀大介氏から、「古代ケヒ神の基礎的研究」として、福井県敦賀市に所在する気比神宮に鎮座する「ケヒ神」について、考古学的な手法と文献を駆使して、その神格の形成・発展過程を追った発表がなされました。午後からは奈良教育大学の金原正明氏から「纏向遺跡の地形環境と最近の調査について」と題して、纏向遺跡の各調査で採取したサンプルから花粉や樹種の分析が行われ、古墳の築造や集落の変遷にともなう環境の変化について発表が行われました。最後に、大阪大学の福永伸哉氏より、大阪大学接合科学研究所の近藤勝義氏との共同研究で、「突線鈕式銅鐸破碎プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義」と題して銅鐸破碎の金属工学的分析と、破碎の意義についての発表をいただきました。

定例研究集会は原則として年1回の開催を予定しており、臨時の研究集会の開催も含め、今後も研究の質の向上に努めていきたいと思っております。また、今回の研究発表の一部は纏向学研究センターの紀要第2号の論考に反映されていますので、ご興味のある方は、ぜひご覧ください。



写真16 開会の挨拶をする石野顧問



写真17 各地からご参加いただきました



写真18 鈴木氏の発表



写真19 堀氏の発表

《纏向遺跡を掘る調査員たち 5》

桜井市の調査員の紹介コーナーです。このコーナーでは、普段はあまり知ることのない発掘調査や報告書の作成に携わっている人々について紹介しています。通信第2・4号で紹介した武田・杉山両君は奈良県内で新たに学芸員・調査員として活躍することとなりました。今回は、平成25年10月から新たに職員に加わった三澤朋未さんを紹介します。

三澤 朋未 (みさわ ともみ)

はじめまして。今年度からお世話になっております三澤と申します。神戸女子大学大学院を修了間近という時期から、桜井市で文化財関係のお仕事をさせていただけることになりました。桜井市には私自身の研究で取り上げた遺跡が多いこともあり、刺激的な毎日を過ごしております。しかし、有名な遺跡が多い＝人々の関心が高いということだと思うので、何か大きな失敗をしてかさないかとびくびくしている時が多々あります。まだまだ頼りないところがあると思いますが、日々勉強と思い頑張っておりますので、暖かく見守っていただければ幸いです。よろしくお願いします。



埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ



埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成26年6月15日（日）までの期間、特別陳列『山の辺の万葉歌碑をたずねて』として、桜井市にある古代から続く道、山の辺の道に点在する万葉歌碑の原本を展示しています。桜井市には万葉集に詠われた場所や自然が多く残り、現在山の辺の道周辺には、近現代の著名な作家・文化人の揮毫による万葉歌碑が置かれています。今回の特別陳列ではそれら歌碑にスポットを当てています。

展示開館時間 9:00～16:30（入館は16:00まで） 休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日。入館料 大人200円 小・中学生100円（20名以上の団体は大人150円 小・中学生50円） お問い合わせ先 TEL0744-42-6005（財）桜井市文化財協会

刊行物のご案内

桜井市立埋蔵文化財センター開館 25 周年記念 シンポジウム要旨集

『シンポジウム「箸墓古墳再考」発表要旨集』 500 円

平成 25 年度特別展 展示図録

『HASHIHAKA ―始まりの前方後円墳―』 800 円

ガイドマップ『改訂第5版纏向遺跡へ行こう!』 200 円（2014 年 3 月改訂）

※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内（財）桜井市文化財協会までお問い合わせください。

お問い合わせ先 TEL 0744-42-6005 FAX 0744-42-1366

<http://www.sakurai-maibun.nara.jp>



編集後記

平成 25 年 10 月に纏向遺跡の集落部分が史跡に指定されました。これまでも纏向古墳群は指定を受けていましたが、集落部分ははじめての指定となります。

今後も保存・活用に邁進するつもりでおりますので、ぜひ応援いただきますようお願い申し上げます。

(M)

纏向考古学通信 Vol.6

発行 平成 26 年 3 月 28 日

編集 桜井市纏向学研究センター

〒 633-0085 奈良県桜井市東田 339

TEL 0744 - 45 - 0590

FAX 0744 - 45 - 0590

ホームページ 纏向学研究センターで検索！

纏向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄付いただいた方に配布しています。

